

A Theme of *The Tempest*

肥田友宏

(武庫川女子大学文学部英米文学科)

A Theme of *The Tempest*

Tomohiro Hida

Department of English, Faculty of Letters,

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan

Last time I suggested that the main theme of this play seems to be the patience and forgiveness of Prospero. I'd like to explain now, through the plot of the play, why *The Tempest* comes to a happy ending.

My conclusion is that Prospero's forgiveness must be patient and positive one. Without it, he could not have honourably been back home.

ACT II, SCENE Iに入ると *Another part of the island*.(S.D.) で Gonzalo がしきりに Alonzo, the King of Naples をなぐさめ、元気づけようとするが、彼は his son, Prince Ferdinand が海でおぼれ死んだと思ひこみ、せっかくのはげましも耳に入らない。この scene の冒頭で Gonzalo の発する

be merry; (II. i. 1)

は Act I の初めの be patient.(I. i. 16) と contrast をなす。

そばで Sebastian と Antonio が Gonzalo の熱心な言葉をいちいち茶化して farce 的な場面をつくる。

Gonzalo の多弁とくどさが Polonius 同様、いささか comic であるが Antonio はこれを

Ant. Fie, what a spendthrift is he of his tongue! (II. i. 24)

と cool にあしらう。そして

Gon. How lush and lusty the grass looks! how green! (ibid., 52)

と感嘆する Gonzalo に

Ant. The ground indeed is tawny. (ibid., 53)

と水をさす。しかしこのかけ合いは必ずしもわざとではなく、二人が全く世界を異にするのかも知れないことが徐々にわかってくる。さて Gonzalo が有難いことながら、

Gon. That our garments, being, as they were, drenched in the sea, hold notwithstanding their freshness and glosses, being rather new-dyed than stained with salt water. (ibid., 61ff.)

であると言うとき、我々はこのにもう一つの sea-change を見ることができる。現実から最も typical で true で lasting なものをとりだして idealize するのが芸術であり、romance であるとするならば、その意味は深い。

Gonzalo になぐさめられても、なおあきらめきれぬ Alonzo は息子の Ferdinando の身を案じて

... what strange fish Hath made his meal on thee? (ibid., 112-3)

となげくが、strange fish という言葉に我々はそれとなく Caliban の存在を予知することもできる。(c.f. II. ii. 26-7)

Alonzo の制止や Antonio のやゆにもかかわらず、この島に理想国家を打ち建てようとする Gonzalo の構想は Thomas More の *Utopia* のように

Gon. I' the commonwealth I would by con-
traries

Execute all things; (ibid., 147-8)

というものであったが、Sebastian には

Seb. Yet he would be king on 't. (II. i. 156)

と片付けられてしまう。しかし彼は King Alonzo の弟であり Antonio はミラノ大公位の横領者である。人間は時に自分たちの野望を他人ごとにするかえて、からかったり、いじめたりするものだ。Antonio も Alonzo の面前で

Ant. Long live Gonzalo! (ibid., 69)

とさげぶが、これは *Hamlet* 冒頭の Long live the king! と同じく treason と usurpation の予感がしないでもない。

そこへ姿の見えない Ariel が音楽をかなでつつ登場すると、初めは [All sleep except Alon., Seb., and Ant. つぎに [Alonso sleeps. Exit Ariel.

というト書きから分かるとおりに Gonzalo が先ず眠り、そのすぐあとから Alonzo が眠る。音楽は平安の symbol であるが、これによって安眠できる人は、まず罪のない Gonzalo、次いで罪が軽いと見なされる Alonzo である。Macbeth shall sleep no more. (II. ii. 43) ではないが Antonio と Sebastian は最後まで眠らず、眠れずである。二人は

Seb. I find not

Myself disposed to sleep.

Ant. Nor I; my spirits are nimble. (II. i. 201-2)

と言うが、不眠は悪事につながるところが安眠と対照的だ。Antonio は

My strong imagination sees a crown

Dropping upon thy head. (ibid., 208-9)

と Sebastian をそそのかす。自分が Milan をうばったように彼にも Naples の王になる可能性を吹きこむ。我々が予感した theme があらわれ、話が核心にせまる。

Ant. Noble Sebastian,

Thou let'st thy fortune sleep—die, rather; wink'st

Whiles thou art waking. (ibid., 215-7)

ここで Antonio は 'sleep' と 'wake' の contrast を用いて Sebastian の決断と実行を促す。これを comic relief と反対の意味で **tragic tention in a comedy** とでもよぶか。だがこの sleep は明らかに feigned sleep であり、平安にはほど遠い。どこか息づまるものを欠くのは、深刻な soliloquy ならぬ dialogue のためか。

ともあれ盲想が現実と置きかえられる重圧を Sebastian は冗談でまぎらそうとする。

Seb. Thou dost snore distinctly;

There's meaning in thy snores. (ibid., 217-8)

夢を実現にまであざむくところは *Macbeth* の Witches に似ているが、これと同じ圧迫感がないのはそのせいであろうか。

このような観察の結果、安眠——不眠 ; 本気——冗談 ; まじめ——不まじめ、といった相対関係が浮かんでくる。でもそれを打ち消すように

Ant. I am more serious than my custom: you

Must be so too, (ibid., 219-20)

と言う台詞を聞くと、この悪人は不まじめなのが常で、良からぬことをたくらむときほど本気でまじめになるところは Gonzalo の理想国と同様、現実と反対の世界にいることが分かる。しかも相手を自分の中へ引きこもうとするのは Lady Macbeth なみかもしれない。しかも良心のかげらもないことは明らかだ。

A Theme of *The Tempest*

Seb. But, for your conscience?

Ant. Ay, sir; where lies that?

(*ibid.*, 275-6)

平素不まじめな人が「そんなものあったっけ。」ととぼけるのだから、内容は本物であろう。さらに Antonio は眠っている King of Naples を見て、

Here lies your brother,

(*ibid.*, 280)

Whom I, with this obedient steel, three inches of it,

Can lay to bed for ever;

(*ibid.*, 283-4)

と murder をにおわす。ついに Sebastian は Antonio と組んで Alonzo と Gonzalo を安眠中に殺害し, conspiracy(II. i. 301) と usurpation を同時に達成しようとする。

Seb. Thy case, dear friend,

Shall be my precedent; as thou got'st Milan,

I'll come by Naples.

(*ibid.*, 290-2)

しかし Ariel によって、この計画は未遂に終るのだが、一方で Caliban も自由を求めて Stephano や Trinculo に寝返ろうとする。

'Ban, 'ban, Cacaliban

Has a new master: get a new man.

Freedom, hey-day! hey-day, freedom!

(II. ii. 188-90)

そして

Cal. As I told thee before, I am subject to a
tyrant, a sorcerer, that by his cunning hath cheated
me of the island.

(III. ii. 48-50)

と言うが、これは寝返りにつきものの口実であり、被害者意識である。しかも Prospero の寝首をかくようそそのかす所は *Macbeth* と共通している。違う点は昼寝の間だ。

Cal. Why, as I told thee, 'tis a custom with him,

I' th' afternoon to sleep: there thou mayst brain him,

Having first seized his books, or with a log

Batter his skull, or paunch him with a stake,

Or cut his wezand with thy knife.

(*ibid.*, 95-9)

Stephano までが Caliban のさそいによって

Ste. Monster, I will kill this man: his daughter

and I will be king and queen,

(*ibid.*, 114-5)

と *Hamlet* なみの murder and adultery を画策するが、いささか間がぬけてはいても深刻さがないのは再三指摘したとおりであるし、前回失敗した Antony と Sebastian が

Ant. [*Aside to Seb.*]

Do not, for one repulse, forego the purpose

That you resolved to effect.

Seb. [*Aside to Ant.*] The next advantage

Will we take throughly.

Ant. [*Aside to Seb.*] Let it be to-night;

と proverbial な発言も交えて互いに今夜の決行を示し合わせるしつこさには、いささか閉口を禁じえない。

これまで主として悪党の生態を観察し、Prospero の許しが如何に困難かを見てきたが、今後彼らを相手にどう対処するかを重点的に考察したい。

それに先立って Prospero には、時間的制約があることを知らねばならぬ。彼の断行がおくれば元も子もない。

先ず第一に彼の手足になって働いてくれる Ariel を、いずれ開放する約束がある。これはすでに Act I, scene ii. で 4 度まで繰り返され保証ずみで Prospero はそれをエサに Ariel をここまで引っぱってきた観もなくはない。

また彼の魔力が及ぶのは島の周辺に限られるために旧敵が島にいる間に和解しないと今までの忍耐が無になりかねない。とくに Miranda のために思えば一刻も早く真人間にたち帰って故国へ戻らねばならぬ。さらに conspiracy の兆候をつみとるのは許しと和解しかない。それ故 Act IV 以降 Prospero's forgiveness は Macbeth's fall のように急転直下実行される。

その手始めに彼がしたことは、

Pros. Then, as my gift and thine own acquisition
Worthily purchased, take my daughter:

で, Ferdinand の苦役をとき, *Romeo and Juliet* とは違って父は娘を仇敵の息子に嫁がせる。堪忍の心の表れだ。Prospero にとってそれなくば自分の引退すら容易でない。

その一方お手上げに近い存在の Caliban すなわち

Pros. A devil, a born devil, on whose nature
Nurture can never stick;

に関しては彼の magic も万能ならず、

Pros.
... and time

Goes upright with his carriage. How's the day?

Ari. On the sixth hour; at which time, my lord,

You said our work should cease.

時は容赦なく過ぎ Prospero が自分の限界を自覚し諦観することが一層必要になってくる。憎しみをもった魔術師から本来の人間感情を取りもどし、妖精 Ariel さえも感じるという心の和らぎを知らいでなろうか、

... shall not myself,

One of their kind, that relish all as sharply,

Passion as they, be kindlier moved than thou art?

と強い否定的意志の表現たる Rhetorical question で意気に感じて人を許す Prospero の内面には物理的以上の精神的時間速度が走ったにちがいない。つらい試練である。我々日本人が過去を水に流す気安さと全く対称的だ。

そのよりどころが

... the rarer action is

In virtue than in vengeance:

という Prospero's pride であり Shakespeare の心こもる本劇最大の theme だと私は信じたい。これこそ悲劇的出発を喜劇的帰結に導く the greatest motive であろう。人間不信を越えた人間性への信頼が不可欠だ。

それにつけても特に注意すべきは、悪人たちの中で Alonzo だけは

Thy dukedom I resign and do entreat
Thou pardon me my wrongs.

とわびをいれているが、最大悪人と目される Antonio は Act III を境に、それまでは冗舌多弁と見えながらもかわらず一切無言という点である。それでも仇を恩義でつぐなうべく

Pros.

For you, most wicked sir, whom to call brother

Would even infect my mouth, I do forgive

Thy rankest fault;

と彼は言うが、それ以外に Duke of Milan の復帰は望めない。相手の謝罪とひきかえに止むなく許すのではな

A Theme of *The Tempest*

い。求めずともこちらから積極的な和解と解決に向かう。どれほどきびしい忍耐と決断であることか。その意味では神の許しに近い。

ところで恐れ、おどろきは Art のはじまりである。だが各種の刺激に強くなりすぎた現代人は、これらの感覚がマヒしている。単純率直なオドロキの精神をとりもどすのが肝要だ。

過去の因果にとらわれぬ Miranda だけが “brave new world” (*ibid.*, 183) を発見できるのである。

Pros.

Let us not burthen our remembrance with

A heaviness that's gone.

(*ibid.*, 199-200)

かくて Prospero も、うれいを去って心を清める。ここで思いうかぶのは Dante の *Divina Commedia, Inferno*, Canto V, ll. 121-3 で Francesca の言う

“Nessun maggior dolore,

che ricordarsi del tempo felice

nella miseria;

(There is no greater pain than to recall a happy time in wretchedness;)²

との contrast である。

ここで Gonzalo の

Gon. Was Milan thrust from Milan, that his
issue

Should become kings of Naples?

(*ibid.*, 205-6)

という Chorus とまがうがごとき台詞は、運命の皮肉因果をのみこんで、客観的に劇を総括する役目をはたしている。しかし吉田健一が新潮文庫 712 『英国の文学』 p.91 で *EPILOGUE* SPOKEN BY PROSPERO について

この終詞が与える名状し難い印象に就て語ったのは、筆者が知っている限りでは、ゲエテの伝記を書いたエミル・ルトヴィヒだけである (Emil Ludwig, “Genius and Character,” tr. Eden and Cedar Paul).

と述べたことに共感できる自分を喜ぶ。

Prospero はここで

. . . . 'tis true,

I must be here confined by you,

Or sent to Naples.

(*Epilogue*, l. 3-5)

と現状を語り

release me from my bands

With the help of your good hands:

(*ibid.*, ll. 9-10)

と願い、さらに

Now I want

Spirits to enforce, art to enchant,

And my ending is despair,

Unless I be relieved by prayer,

(*ibid.*, ll. 13-6)

と観客にうたえる。自分の個人感情を含むすべてを無にして客観性にゆだねる、ものさびしくもすみきった心に涙にじむ思いがするのは私だけか。Shakespeare も同じ気持であったろう。Mozart の曲が究極において悲痛であるように *The Tempest* をしめくくる Epilogue の tone は前述の tragic tension に近い気さえする。

かくして Prospero's patience による Comedy of Forgiveness は本劇の another theme ともいえる最後の言葉で幕をとじる。

Let your indulgence set me free.

(*ibid.*, 20)

これが Ariel を解放したあと唯一かれの望みであった。

Notes;—

- 1) Shakespeare の引用は *The Works of Shakespeare : The Globe Edition*, Cambridge(1864) によった.
- 2) *The Inferno of Dante Alighieri ; The Temple Classics*, J. M. Dent & Sons Ltd. pp. 54-6(1970)